

広報うつくし

特集

牛久市の教育創造(2)

企画 戦略的広報特定プロジェクト

発行日 平成26年2月1日

学びの共同体へ取り組み加速

先生も校長も学び合う牛久市の教育



分からなかったら仲間へ聞く。聞かれたら教える。学び合いでは子どもの力を最大限に活用します。

着実に学び合いの成果

学力は全国トップレベル

文科省が昨年度に行った全国学力テストの結果を見ると、牛久市の小中学生の学力は、全国でもトップグループと言ってもいい高いレベルにあります。これは牛久市が全小中学校で導入している「学び合い」の成果です。学び合いは、先生に教わるだけでなく、子どもたちが互いにつながり合いながら学ぶ中で、先生がそれをバックアップする授業の方法です。それによって1人1人全ての子どもに学びを保障するのです。そのために牛久市の小中学校では、先生も校長も不断の学び合いをやっています。そういう「学びの共同体」への努力が牛久市の子どもたちの学力向上に直結しているのです。

いて行われました。Aは知識を問う問題、Bは応用力を問う問題です。文科省が発表している公立小中学校の4科目の都道府県別平均と牛久市の小中学校の成績を比べると、牛久市の小学校全体の平均は全国4位の県とほぼ同レベル。中学校全体の平均はさらに上がって、2位の県の平均とほぼ同じです。

解き方は各自いろいろ

多様な考え方、みんなで検証

先生は頃合いを見計らって机をコの字型の配列に戻させ、グループの違う何人かの子どもにも問題をどのようにか考えたか発表させます。解決の見通しは子どもによっていろいろです。こんな考え方もあったのかというようにユニークな考え方もたくさん出て来ます。先生はその1つ1つについて、どこからそういう考え方が出てくるのかを教科書や友だちの発表と関係づけながら説明させ、その説明に対する他の子ども

グループになって考えよう」と言うと、子どもは1斉に4人1組になるように机を並べ直して問題を解き始めます。1人で解ける子どもは1人で解いていきます。分からない子どもは周りの子どもにも教わります。誰も分からない場合は4人で検討が始まります。一斉授業で教わった経験しかなく、授業中私語を禁止されていた大人世代は、最初はこの光景にびっくりします。いきなり教室の至る所で会話が始まるからです。

えを聞きます。ここでは正解よりも、子どもがどこでつまづいたか、どこで困っているかをみんなで共有することが大切にされます。そうやって全ての子どもが学びを成立させながら授業を進めていきます。また、授業のスタートや途中に「ジャンプの課題」といったレベルの高い課題を入れていきます。こうした課題に取り組みすることで、多様な考えを引き出した後、みんなが参加しなければならぬ状況を作っていきます。さらに「ジャンプの課題」に取り組みことで基礎・基本の活用が進み、確実な定着も図られます。

昨年度の全国学力テスト(正式名は全国学力・学習状況調査)は全国の国公私立小中学校3万774校で、国語A、国語B、算数・数学A、算数・数学Bにつ

分からなければ仲間へ聞く

4人1組でグループ学習

学び合いは従来の一斉授業に比べると、教え方が本質的に違います。一斉授業では、先生は教科書に沿って説明し、子どもはそれを1人で受け止め理解し記憶していきます。問題を解くときも1人で考えて解いていくことが中心です。学び合いの授業では、自分1人で考えても分からない子どもは、周りの子どもに「教えて」と聞くことか

ら学びがスタートします。聞かれた子どもは、相手が納得いくまで教えてあげるのがルールです。例えば数学の時間。まず先生が問題を出し、この間子どもはみんなが顔を向き合えるようにコの字型の机の配列で、各自問題の意味を考えます。子どもが問題の意味を正しく把握できるように、先生が若干説明を加え「では



お互いの発言を聴き合うときはコの字型の席になります。

「協同」で学びの質高める

子どもの力に依拠し授業を創る

「学び合い」と「学びの共同体」を提唱し、日本はもとより海外の授業改革と学校改革をリードし、牛久市の学び合いも全面的にバックアップしてくれてい

る前日本教育学会会長で東京大学名誉教授・学習院大学教授の佐藤学氏は、このような学び合いの姿を「活動的で協同的で反省的な学び」と言っています。人間にとって「学び」とは、モノとの出会いと対話による「活動」、他者との出会いと対話による「協同」、自身との出会いと対話による「反省」が三位一体となって遂行される営みです。その営みの質をより高め、且つ、そこに全ての子どもが参加できるようにするために、先生は子どもの力に依拠し、子どもが周りの仲間と最大限に協同できる授業を組織します。そこが、子どもの協同がない一斉授業と学び合いの根本的に違うところ

目指すのは日本一の教育

全ての先生が授業を公開

授業研究にスーパーバイザー招聘

学び合いの授業はこれまでの一斉授業とは進め方が基本的に違うので、いま牛久市の先生方はどの小中学校でも、学び合いの授業の進め方を常に研究しています。そのやり方は次のようなものです。

牛久市の先生方は全員、1年に最低1回は自分の授業を他の先生方に公開し、先生方みんなで授業研究を行います。牛久市の学校は先生が30人以上いる学校が

多いので、毎月3人ぐらいの先生が授業を公開し、それぞれの授業について研究協議が行われます。

公開授業は、その学校の先生方、教育委員会の指導主事のほか、牛久市が先生方の学び合いの授業を、スーパーバイザーとして指導していただくようお願いしている教育研究者も参加します。最近では、市内の学校や茨城県内の自治体はもとより、他の都道府県、外国の

教育関係者が参観に来ることも非常に増えました。学校によっては先生や教育関係者の参観が年に何十回と

授業の具体的な事実にして

1人1人の学びをチェック

先生たちの協議で一番よく話題になるのは、「その授業で子どもたちがどれだけ学びに参加していたか」ということです。学び合いは「全ての子どもに学びを保障する」ことを目指していますから、「どうすれば全ての子どもを学びに参加させることができるか」が、常に授業研究の最重要テーマになるのです。

先生は、助けを必要としている子どもに対して適切な対応を取れたか。先生の無意識の言動が子どもの思考を中断させるよ

あるところもあります。授業が終わると先生方は、多くの場合学年ごとに集まって、その授業について様々な角度から検討します。参観した先生方は、それを周りで聞いている場合と、自分たちも協議に参加して、感想や意見を述べる場合とがあります。

うなことはなかったか。子どもはちゃんとしたつづきをキヤッチし学びを進展させることができたか。そういったことが、その授業での具体的な事実に基づいて、詳細に検討されます。

これまでの一斉授業では、学力の低い子どもは授業についていけず、学力の高い子どもは易すぎる教科内容に飽きてしまい、授業から離脱してしまうことが問題でした。しかし今、牛久市の小中学校では、子どもたちが1人残らず、授業の始めから終わりまで、

「教えて」と言える子を育てる

先生は隣の子につないであげる

課題に対して、答えたり考えたりみんなで話し合ったりして、1人も授業から脱落しない光景がよく見られます。なぜそういうことが可能だったのか。うまくいった要因もいろいろな角度から掘り起こされます。逆に、う

先生方の研究協議が終わると、スーパーバイザーの講話があります。これは質疑応答も含めると15

まく学び合いに参加できなかった、あるいはしなかった子どもについては、なぜそうだったのか。授業の進め方や教材の適否だけでなく、その子どもの家庭環境や学校での人間関係などにまで踏み込んで検討されます。

1・5時間ぐらいかかりました。ここでは実際に行われた授業について、進め方や子どもへの目配りの仕方な

どについて詳細な指導が行われます。こういった努力の積み重ねで、いま牛久市の小中学校では、授業の進め方について学び合いを実現するための幾つかの基本的なノウハウが共有されつつあります。

その第1は、全ての子どもを、分らなかったら周りの友だちに「ここ、どうするの」と聞ける子どもに育てようということです。分からないで立ち往生している子どもや孤立している子どもを見つけたら、「友だちに聞いてもらい」と隣の子にもつないであげるのが、先生方の非常に重要な役割になっています。



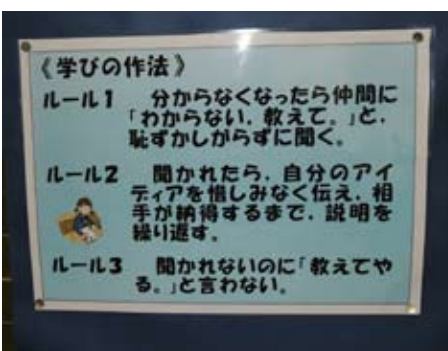
先生方は子どもの学ぶ姿をビデオで確認しながら授業研究をします。



説明する子ども、聴く子ども。みんなが学びに参加しています。



廊下のモニターで子どもたちの学ぶ姿をいつでも見ることが出来ます。



こういう標語で子どもたちに学び合いの作法を教えています。

「間違っても恥ずかしくないんだ」

安心して学べる授業を追求

分からないでいる子どもを1人1人すくい上げるためには、先生方は、子ども

分けられないでいる子どもを1人1人すくい上げるためには、先生方は、子ども

な指導になっていくかも知れません。一斉授業では多くの先生が正解を求めることに性急だったので、指導観の変更というような基本的な課題も含めて、先生方は真剣な努力を続けています。

そのためには先生方は、子ども1人1人の表情を見ながら授業を進めることが基本になります。学べないでいる子どもを見つけて、分からないでいる子どもを見つけて、そういう子どもを学び合える子どもに育てること——そうやって1人1人全ての子どもを学びに参加させるのです。学び合いでは「分からない」と言えることに非常に大きな価値を見出しています。

蓄積する学び合いのノウハウ

授業の中で人間関係育てる

話すことより聞くことを重視

学び合いが浸透している学校に行くと、全体にとっても落ち着いた雰囲気を感じます。授業を参観すると、グループ学習の時は賑やかですが、コの字型になって先生やみんなの発言を聞くときなどは、教室全体が非常にしつとりとしていて静かです。

これは先生方が「良く聴き合う教室」をつくることを意識して努力しているからです。学び込んでいくと静かに考えるようになるということも言えます。

学びという能動的な活動も、相手の言うことをいったん受け止めて対応する受

動性が基礎になっていません。授業は、この「受動的働きが最大限に生かされる場」でなければなりません。そのため学び合いでは「話す」ことよりも「聞く」ことの方が、はるかに大切にされているのです。

子どもたちの人間関係を授業の中で育てることの重要性についても、牛久市の先生方の間では急速に認識が深まっています。1日の学校生活の中で、子どもが一番長い時間を過ごすのは授業です。その中で、1人1人の学びと豊かな人間関係をいかに育てていくか。いま牛久市の先

生方が創ろうと努力しているのは、そういう授業です。そういう授業を行えば、

つぶやきから自己有用感へ 子どもの表情に感度良く反応

ではどうすれば子ども同士をタイミング良くつなげ、良い人間関係をつくれるか。ここでもキーワードは、1人1人の表情をよく見ながら授業を進めるといふことです。困っている子ども、苦しんでいる子ども、疑問を持っている子どもを見逃していないか。一斉授業ではほとんど無視さ

れてきたつぶやきも、学び合いでは非常に大切にされます。子どものつぶやきに先生が感度良く反応し、それをクラス全体につないでみんなで考える。つぶやいた子どもは、授業の中で自分の存在価値を発見し、自分に自信を持って周りの子ども

問題行動や不登校が減り学力が高まるという実績は、牛久市では既にはつきりした形で生まれています。授業中、机に突っ伏している子どもも、一見学びを諦めたように見える子どもも、実際は学びたいし分かったと思っていることを、牛久

市の先生方はよく分かっています。そういう子どもを、授業の中でほかの子どもにもつないであげること、子ども同士の良いつながりが育っている、机に突っ伏して孤立していた子どもも、教室の中に自分の居場所ができ、表情も生き生きしてくるのです。

や先生と、前向きにつながりをつくっていきけるのです。学校によっては、先生全員が、子どもたちが良い表情で学んでいる姿を写真に撮って先生同士で見せ合うことを申し合わせているところもあります。教室に良い表情が溢れるほど子ども同士の人間関係が育ち、教室が安心して学べる場所になれば、「ねえ、どうしてそうなるの」といった言葉も出しやすくなります。

グループ学習で学力向上

学び合いで生きるジャンプの課題

いま日本でも世界でも、学び合いは学力向上につながるという実績が次々に生み出されています。それに一番直接的に貢献している要因の1つが4人1組のグループ学習です。

学び合いがグループ学習を多用する狙いは2つあります。1つは、個人学習を協同化することです。分からない子どもも隣の子どもに聞くことで、分からないまま次のステップに進んでしまうということがなくなるのです。

もう1つの狙いは、背伸

考過程だけでなく、そこで使われた基礎知識を身につけることができます。学力の高い子どもは低い

子どもに説明する過程で、自分の考え方を整理定着させ、思考力をさらに高めま

学力向上と人間関係の構築

先生方の努力で「日本一」の期待

背伸びとジャンプを可能にすることで、学び合いは、全ての子どもにレベルの高い学びに挑戦する機会を与え、多くの場合、教えている先生自身も驚くような急速な学力向上を実現しています。

どういうタイミングで、どういうジャンプの課題を提示すれば、1人1人の子どもにレベルの高い学びを成立させることができるか。牛久市の先生方の中で

は、ジャンプの課題を授業で最大限に生かすことが、授業研究の日常的なテーマになっています。

こうやっていま牛久市の小中学校では、子どもの学力向上や人間関係の構築につながる教え方のノウハウが着実に蓄積されつつあります。そういう先生方の努力を頼みとして、牛久市は日本一の教育を目指そうとしているのです。



学び合いでは人の話を聴くことが大切にされています。



授業の中で良い人間関係が育っています。



授業についての研究協議の後、スーパーバイザーの詳細な指導が行われます。

欠かせない校長のリーダーシップ

先生が専門家として育ち合う

「同僚性」を築き学びの共同体へ

牛久市では、校長先生も学び合いの授業について一生懸命勉強しています。学び合いと学びの共同体づくりでは、校長のリーダーシップが決定的に重要とされています。それは、学校内の全ての先生が、少なくとも1年に1回は自分の授業を公開し、全学年あるいは学年毎の先生と一緒に、互いに専門家として育ち合

う「同僚性」を築くことが、学びの共同体づくりに欠かせないからです。よその自治体から牛久市の小中学校に初めて異動してきた先生は、校長も含めて、学び合いを初めて経験することが多いようです。そういう場合は校長も、佐藤学教授の著作『授業を変える、学校が変わる』『学校の挑戦』や、早くから公立中学校の学び合いで成果を上

げ、現在牛久市のスーパーバイザーも務めている佐藤雅彰氏の『公立中学校の挑戦』同じく岩本泰則氏の『学びの共同体を目指して』等の著作を読むことからスタートするよう勧められています。自分の学校で行われる授業研究は、校長にとっても学び合いを勉強する最も豊かな機会になっています。大規模な授業研究の場合は、校長、教頭、教務主任、

研究主任、学年主任が毎週校長室で研究の進め方について話し合います。公開する授業については、授業を担当する先生だけでなく、同じ教科の先生や同じ学年の先生方が集まって、授業の具体的な進め方について工夫をします。その検討会に校長が加わることもしばしばです。「その時間が一番楽しい」という校長もいます。

牛久市の小中学校ではいつもどこかの学校で学び合いのための授業研究が行われています。校長がよその学校の授業研究に出かけることもよくあります。

校長の研修のために教育委員会の指導主事が学び合いの授業を行い、それを校長全員で参観し、研究協議を行うといったことも行われています。昨年は静岡県富士市立元吉原中学校、神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校といった学び合いで成果を挙げている学校を視察し、7月には牛久市の校長、教頭、教務主任が集まって、佐藤学教授の質疑応答も含めて3時間近い講演「教師たちが学び合う学校づくり」を聴いています。

いま牛久市の小中学校では、どの学校でも毎日校長が授業を見て回っています。全校児童の顔と名前を覚えようと努力している校長もいます。毎朝門や玄関のところでも子どもを出迎える校長もたくさんいます。毎日授業を見て回り、子ども

の顔を覚え、毎朝子どもを出迎える

互いに専門家として育ち合

う「同僚性」を築くことが、

自分の学校で行われる授

いつもどこかの学校で学

校長の研修のために教育

いま牛久市の小中学校で

の顔を覚え、毎朝

子どもを出迎える



指導主事の授業を参観する校長先生方。

教育委員会も活発

指導主事の学校訪問6倍増

教育長も頻繁に「ふらっと訪問」

牛久市は、校長が意欲的な特定の学校だけでなく、全ての小中学校に学び合いを浸透させようとしていきますから、教育委員会の果たす役割は決定的に重要です。その教育委員会の動きがここに来てさらに活発になってきています。指導主事が学校に出向く回数が増えています。年

度を通すと6倍に増えるでしょう。指導主事が学校に出向

くのは学校から要請があるからです。学校で授業を見て、先生方と学び合いの進め方について研究するのです。「ふらっと訪問」と称して、教育長もよく学校に出かけます。

今年度牛久市の教育スーパーバイザーは、佐藤学研究室のスタッフを中心に大幅に増えて現在15人。この方々が毎月入れ替わり立ち替わり牛久市の小中学校に来て指導してくれています。そのそうそうたる顔ぶれは「うしくの教育」第2号で紹介されます。

こういつた動きを背景に

も期待できる部分です。

佐藤学研究室が全面協力

スーパーバイザー15人体制

スーパーバイザーとして牛久市の先生方や校長に学び合いを指導する教育研究者の陣容も、今年度から大幅に強化されました。昨年4月に池邊

市長、染谷教育長、中島校長会長が佐藤学教授を直接訪ねて協力要請を行い、佐藤学研究室に牛久市の学び合いと学びの共同体づくりを全面

協力していただき、今年度牛久市の教育スーパーバイザーは、佐藤学研究室のスタッフを中心に大幅に増えて現在15人。この方々が毎月入れ替わり立ち替わり牛久市の小中学校に来て指導してくれています。そのそうそうたる顔ぶれは「うしくの教育」第2号で紹介されます。

こういつた動きを背景に

も期待できる部分です。



佐藤学先生に学ぶ会で、佐藤教授の講演を聴く校長先生方。



校長室に全校児童の写真。

校長室で研究の進め方について話し合います。

校長会でも定期的に研修

毎日授業を見て回る校長先生

公開する授業について

牛久市の校長が全員集

を行うといったことも行

子どもが良い学び

といた、1人1人の子

3倍に増えています。年

さ

と学

が専

育環

も期